

高知県の里地・里山

【現 状】

高知県の中山間地は急峻な地形の山地が連なり、日本の中でも特に棚田が卓越している地域の一つです。写真1のように狭い棚田が連なる美しい景観をあちこちで見ることができます。里地・里山には、お米や野菜をつくる田んぼや畑だけでなく、草地、雑木林、スギやヒノキの植林、竹林など人間の作り出したさまざまな植生がモザイク状に入り混じっています。それぞれの植生は、耕作、刈り取り、火入れ、伐採などの人によるさまざまな攪乱作用を受けて維持されてきました。このような攪乱作用が、構成種や多様性の異なるさまざまな生態系を育んできましたので、里地・里山には実に多様な動植物が暮らしていました（写真2～写真5）。しかし、近年になって中山間地では高齢化と過疎化が進み、放棄される田畑が増え、周囲の植生にも人手が加わらなくなったことにより、以前のような多様な生態系が失われています。



写真1. 大豊町怒田地区の棚田

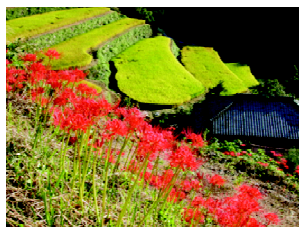


写真2. 秋の棚田と法面に咲くヒガンバナ



写真3. ミズマツバ（水田に生育する絶滅危惧種）



写真4. 刈取り草地

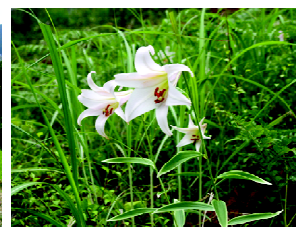


写真5. ササユリ（草地に生育する絶滅危惧種）

【変 化】

図1は農林水産省統計情報部のデータに基づく全国、高知県、吾川郡いの町成山地区における1戸あたりの放棄耕作地面積の推移を示しています。いずれもが年々放棄される耕作地面積が増大している様子が見て取れます。特に、成山地区の棚田や畑の放棄面積は1980年ころまではわずかであったものの、その後急激に放棄が進んでいます。写真6は昭和初期に撮影された成山地区本村中心部の景観、写真7は

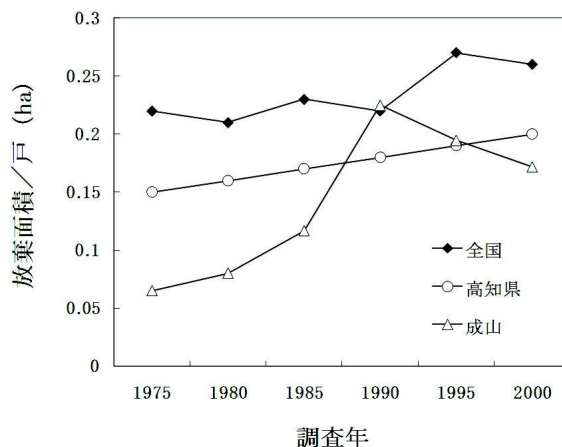


図1. 全国、高知県、成山地区における農家1戸あたりの放棄農地面積の推移



写真 6. 昭和初期の成山地区の景観
成山小学校史編纂委員会（1986）より引用。



写真 7. 2002 年の成山地区の景観。

2002 年のほぼ同じ場所の景観です。この 2 枚の写真を比べてみると、畑や棚田などの農地が大きく減少し、植林や竹林が著しく増加しているのが分かります。写真 1 の大豊町怒田地区は、高知市の北東約 35km に位置する日本でも有数の地すべり地として知られているところです。斜面は保水性の良さから水田として広く利用されており、棚田が広がっていますが、過疎化や高齢化が進むに従って水田からゆず畑やケール畑などへの転作が進んでいて、耕作放棄された棚田も数多くみられます。落葉広葉樹林やアカマツ林は現在でも広く残存していますが、薪炭林としての利用はなくなり、以前は広い範囲に作られていた桑畑も今ではほとんどなく、植林が増加しています。

【人との関わり】

私たちは里地・里山から暮らしに必要なものを手に入れていました。田畑からは食料を、雑木林からは燃料としての薪や炭、肥料に使う落ち葉を、刈取り草地からは牛や馬の餌、有機肥料、かやぶき屋根の材料に使うススキなどの草を、植林からは家などを立てるための材木を得ていたのです。多様な植生を維持するために、耕作、刈取り、火入れ、伐採などを行っていましたが、このような人による植生への攪乱作用が失われてしまうと、多様な生態系が失われるとともに、そこに暮らしていた生物の種数が減少してしまうことが知られています。日本政府が 2007 年に提示した第三次生物多様性国家戦略の中でも、里地・里山などの手入れ不足による自然の質の変化が、生物多様性喪失の第 2 の危機としてうたわれています。われわれ日本人の生活や文化が変質し、里地・里山といわれる地域で営んできた伝統的な暮らしを捨てる人が増えたことによる、生物多様性喪失の危機です。里地・里山は生活に必要な物資を持続的に供給してくれる場としてだけでなく、実は多くの動植物の生活の場としても重要であったという事実が再認識されています。また、放棄された棚田は維持管理されないために、石垣が崩壊することも多く、防災上の問題も指摘されています。棚田は米などの農作物の生産の場としてだけでなく、表層水を蓄える保水と洪水の調節機能、それに伴う斜面崩壊や土壌の侵食を防止する機能など、地域の生態系を保全するうえで重要な極めて多面的な機能を備えています。高知県の山里では、高齢化と過疎化の進行によって限界集落と言われる場所が急激に増加しており、こらからの対策が急がれます。